WORLDBEYONDWAR.org
a global movement to end all wars

グローバルな安全保障システムの構築：戦争をなくすために

World BEYOND War 簡略版

日本語

3　1.0 序
4　2.0 グローバルな安全保障システムが必要な理由
4　2.1 古い安全保障のパラダイム: 戦争の鉄の檻
5　2.2 本当の安全はどう得られるか
6　2.2.1 人間の安全保障および共通安全保障
6　3.0 平和システムを可能にする理由
6　3.1 代替システムはすでにある
7　3.2 非暴力：平和への基盤
7　4.0 もう１つの地球規模の安全保障
7　4.1 システムとはどのようなものか
8　4.2 もう１つの地球規模の安全保障システム
10　グローバルな安全保障システム概略
11　5.0 安全保障の非軍事化
11　5.1 政策および行動への提言
11　6.0 非暴力による紛争への対処
12　6.1 政策と行動への提言
12　7.0 平和の文化の創造
12　7. 1 政策と行動提言
13　8.0 転換を加速する：WORLD BEYOND WAR運動を巻き起こすために
13　8.1 連合の進展
13　8.2 平和教育プログラム
14　8.3 非暴力直接行動キャンペーン
14　9.0 結語
16　Poster

WORLDBEYONDWAR.org
a global movement to end all wars

グローバルな安全保障システムの構築：戦争をなくすために

World Beyond War 簡略版

worldbeyondwar.org/alternative

1.0 序

国内外における国家およびさまざまな紛争にたいして、暴力は必然ではないとのあまたの証拠がある。そこで、World BEYOND Warは、戦争をかならずなくすことができるとの確信をもつにいたった。人類史では、戦争がない状態がほとんどで、人びとは戦争のない状況で暮らしてきた。武力行使がはじめてなされたのは１万年以前（人類史において、ホモサピエンスとなったのは、およそ20万年前でごく最近のこと）のことにもかかわらず、武装国家によって攻撃への不安にさいなまれるようになった。そして武器をもって攻撃をしかける敵を同様に自分も武装をするという悪循環におちいり、暴力が連鎖するようになった。この100年間、暴力の連鎖はエスカレートし、武力行使が絶えないまでになった。おそろしいほどの破壊力をもつ武器が開発され、戦争は今や、文明を滅ぼしかねないほどのかつてない脅威となっている。一方、非暴力によって紛争に対処する画期的なあらたな知識と方法が150年ほど前に生まれている。今こそ、戦争をなくす時であり、そのために地球をあげて、こぞってあらゆる努力をはらい、戦争をなくすことができるものと確信するにいたったのである。

A Global Security System: An Alternative to War (AGSS)の要旨は、戦争をなくすための核心となる。戦争システムを構成するものを取り払い、打ち壊し、あらゆる人が安心して暮すことのできる平和への礎をきずくとなるものである。あらゆる戦争をなくすための包括的な行動計画をAGSSは提案する。戦争をなくすための道筋は、１）あらたな安全保障についてあきらかにすること、２）非暴力による紛争解決、３）平和の文化の創造の３つからなる地球安全保障システムの構築によって達成される。これら３つからAGSSによる行動計画は構成されている。

戦争をなくすために行動することに関心をよせる人びとにとって、この冊子（要旨）は、願ってもない手がかりとなるであろう。また、平和的への世界秩序のための市民行動や政策提言のために、きわめて重要なものである。この冊子にある考え方や、方略、原則は完全版において詳述されており、ウエッブサイト（ www.worldbeyondwar.org/alternative ）からPDFやebook、印刷版が入手できるようになっている。

AGSSによるStudy War No More（二度と戦争をしないために）というオンラインガイドからも、さまざまな情報を得ることができる。オンラインガイドは、独学で学ぶことができるように、また中高や大学での授業で、地域グループでの対話や討論で活用できるように、Global Campaign for Peace Educationとの連携でつくられた。またStudy War No More（二度と戦争をしないために）では、地球規模でのオルタナティブな安全保障のために国際的な知識人、活動家、研究者などがかかわっている人びとや団体による映像を視聴することで、具体的に学ぶことができるようもなっている。このオンライン講座Study War No More（二度と戦争をしないために）には、www.globalsecurity.worldbeyondwar.org. から登録をすることができる。

2.0 グローバルな安全保障システムが必要な理由

近代史は、戦争が人間性そのものであるかのように、戦争に関して微に入り細にわたって描かれる。アメリカ人の人類学者でマーガレット・ミードが「戦争はわたしたちに遺伝子としてあるわけでなく、人間によって創られたものである」と述べたのはよく知られている。戦争の原因は遺伝的要因にあるといわれるが、それには科学的な証拠がないばかりでなく、われわれの祖先である狩猟民が戦争をしていたという有力な証拠もない。1986年に多くの科学者がスペインのセビリアに集まり、戦争は、人間が生まれ持った本能にあるという幻想をきっぱり葬りさった。それが「暴力に関するセビリア声明(The Seville Statement on Violence)」1であり、戦争をはじめるのを正当化するのに、きまってよく用いられる論法である生物学的決定論をよしとせず、異をとなえた。

マーガレット・ミードは、戦争は文化的に学ばれた行為であるとした。「人びとが戦争をしようとする場合、それぞれ状況が異なる。それぞれの社会においてなんらかの原因があり、操られ、戦争となる」と述べている。

戦争は人類が創りだしたものである。戦争はわれわれが考えだし、教育によって、たとえば街にある戦争記念碑のように文化として固定化されたものといえる。となると、するべきことは、何であろうか。ミードは、1）旧来の問題点を認識すること、2）それにとってかわる代替となる、あたらしいものをつくることによって、社会的につくられたものを、別に置き換えることができるとした。

戦争は害悪であり、少しも良いことはないということは、旧来の問題点としてひろく認識されている。そこで、戦争システムにとってかわる代替（オルタナティブ）となるものについて、AGSSはあきらかする。現在、戦争システムを代替するものとして何があるのか、さらにより望ましいものは何か、いかにそれらを構想するのか、戦争システムにとってかわる代替である平和システムへの明確なビジョンを持つことによって、新しい社会への変化を促進することができる。そのための必要な知識やスキル、そしてどのように政治的に関与し、実践するやり方があるか、また移行期における自分たちの役割はどのようなものかについて述べる。

マーガレット・ミードは、旧来の悪弊をなくすためには、社会創造が可能だと信じなければならないとした。戦争システムという既成概念は、わたくしたちに深くしみこんでいて、否定的なものの見方を脱することは容易ではない。現在から、ひきだされる将来どうなるかという確率によって、望ましい未来を描くことは、困難である。悲観的なものの見方では、現在のシステムからは将来は暗いものとなる。他方、創造的な見方では、わずかな可能性から発想を展開させる。われわれは、現在に規定される、なってしまうだろう将来から、望ましい未来へと転換するために、人類が人為的に造りだした戦争システムの連鎖と、わたくしたち自身の思考を縛っている軍事主義（ミリタリズム）をぬぐいさらなければならない。平和学の草分けであるケネス・ボールディングによる「いかなることも、可能だ」という言葉をこころに刻むことが、たいせつだ。戦争は不可避だというのは、誤ったこと（でもそれを言うことで、それ）が現実となる自己充足的予言である。戦争をなくすことができると、考えることにより、本当の平和システムを構築するための扉を開くことを可能にするのである。

2.1古い安全保障のパラダイム：戦争の鉄の檻

前世紀の２つの世界大戦による惨禍、および冷戦は、もっぱら軍事力によってのみ安全保障がなされるという固定観念を人びとにいだかせてしまった。軍事による安全保障は「ちからによる平和」という言葉に顕著なように、軍事費の額からもあきらかである。戦争抵抗者連盟2の丹念な調べによれば、米国連邦政府予算の50%以上が、軍事に支出されている。軍事が優先され、人間らしい生活に最低限、基本的に必要とされるものや、教育

や食べ物の入手といった福祉が人びとにいき届かなくなってしまっているのである。

古代中央集権国家でも、今日、われわれが直面するような問題に直面していた。平和な国が武装した国に攻撃されたら、選択肢は「服従するか、逃げるか、敵のように戦いに勝つための戦争国家となるか」という３つだとされた。そこで、国ぐには軍事化し、多くは武装するようになった。人類は、戦争という鉄の檻に自ら入り、鍵をかけてしまったかのように、争いは軍事化したのである。戦争は、集団間で一定期間続く組織化された戦闘となり、多大な犠牲者をだすようになった。戦争は、軍隊および武器、軍需産業、政策、計画、プロパガンダ、偏見、ミリタリズムを正当化また再生産し、大量殺人をも可能にしたのである。

戦争が起こるには、なんらかの固有の要因があり、戦争はけっして、自然に「発生する」のではない。国際紛争あるいは内戦は、戦争システムという社会システムの必然の結果である。しかし、戦争システムは、相互に関連する複雑な信念や価値であり、真実や公益は周縁においやられ、あからさまに隠蔽されている。

World BEYOND Warは戦争に関する一般的な幻想3や、事実とされていることがらの真相をあきらかにするものである。戦争にたいする幻想を以下にあげる。
・戦争は不可避であり、人類はいつも戦争をしていて、つねに戦争はある。
・戦争は「人間の性」である。
・戦争は必要なものである。
・戦争は益のあるものだ。
・世界は「危険な場所」だ。
・世界は勝ちか、負けるかのいずれか。相手が得るものは、自分が得られない、その逆も。誰かがつねに支配する。相手より自分たちが優れている。
・「敵」はかならずいる。

戦争システムは、社会制度や武器、技術をも含むものである。戦争システムは社会に深く浸透し、あらゆる点において相乗的に強化され、頑丈なものとなっている。世界のほんの一握りのゆたかな国が、世界で使われるほとんどの武器を生産しており、武器を貧しい国や集団に売りつけたり、供与される。こうした武器による攻撃があり、戦争は正当化される。社会のあらゆる面に浸透する戦争システムにより、戦争は系統的に組織され、計画的に軍隊を長期間あるいは事前に配置することもなされる。とくにアメリカ合衆国では、経済にも戦争は組み込まれ、学校や宗教団体でも、家族での慣習にも文化として深く根づくようになり、スポーツイベントが軍事化し、戦争が賛美され、ゲームや映画、あたらしいメディアでも誇大に宣伝される。戦争以外のこと、戦争を代替するものについては知られることもなく、学ぶ機会もない。

戦争は、きわめて単純な固定的なものの見方によって準備される。しかし、戦争は、大衆による支持がなくとも、開始され続くことになる。政府は、侵略にたいして、野蛮な敵に負けて支配されるか、石器時代さながら爆弾をなげるか、つまり服従するか、たたかうか、この2つの選択しかないとひとり合点して、大衆も納得させられてしまうのである。

このような固定的なものの見方を変えないと、戦争をなくすことはできない。何らかの行為には、何らかの原因があるので、侵略行為の原因は何か、本質的に問うことによって、戦争をなくすことができる。医療では症状のみを治療しても、病気は完治しない。銃の引き金をひく前に、戦争以外になすことがないか、熟慮しなければならない。この冊子こそが平和への青写真となるのである。

2.2 本当の安全はどう得られるか
安全保障、とりわけ「国家安全保障」は、ざんねんながら世界における自国の軍事力とのかねあいでとらえられている。秩序なき国家システム安全保障というパラダイムから、人類および地球のニーズにもとづくパラダイムへとシフトする必要がある。これまでの国家安全保障という考え方は、国民国家による国際社会における覇権の競合であるとされてきた。安全保障とは巨額の軍事費かけて強大な軍隊をつくるということではなく、安全

保障をより広くとらえる必要があるということは、大きな支持を得てきている。

2.2.1人間の安全保障および共通安全保障

人間の安全保障と共通安全保障が、旧来のパラダイムにたいする代替となる枠組みである。人間の安全保障は人間中心であり、身体的安全と、経済社会的な福利、人間としての価値と尊厳、人権擁護、基本的自由を重んじるものである。人間の安全保障は持続可能な開発や環境正義、基本的な人びとの必要を満たすことにより実現される。

戦争という鉄の檻にとらえられ、そのなかで紛争へ対処することは、自分自身を滅ぼすことにつながる。相手の国を脅かし、自国の安全をはかるというのは「安全保障のジレンマ」の構図である。通常兵器をはじめ、凄惨な大量破壊兵器である核兵器、生物兵器、化学兵器を開発し、保持するという軍拡競争をエスカレートさせてきた。相手への脅威では、安全保障は得られない。武装をすることによって相手の信頼が失われ、猜疑心から戦争が起こり、とめどなく暴力が拡大する。他方、共通安全保障は、すべての国が安全な時に、当該国が安全だとする。国家安全保障モデルでは、もはや国家間の壁に穴がたくさんあいたような状況となっていて、安全とはいえない。もともと国家主権の考え方は、地理的な領土に境界を定め、境を超えようとする者をすべて管理しようとするものであって、今日のように高度に技術が発達した社会では時代遅れとなった。国家はもはや、思想を閉じ込めたり、人びとが移民するのをさまたげたり、経済活動や感染症、情報をとどめさせることはできず、はるかかなたから大陸間弾道弾による攻撃が可能になり、銀行や工場、証券取引へのサイバー攻撃の脅威にもさらされるようになった。いかなる国家も孤立することはできず、地球規模での安全保障が実現されなければならない。共通安全保障というのは端的にいえば、皆が安全にならなければ、誰も安全にならない、ということだ。

3.0 平和システムを可能にする理由

戦争は必然だという考え方から、戦争が起こる。なんらかの思い込みが現実となってしまう、予言の自己成就という現象が知られている。戦争をなくすのは可能だ、と思うことにより、現実的な平和システムへのとりくみを前向きにすすめるための扉をひらくことができる。

3.1 代替システムはすでにある

これまで述べたように、一万年ほど前に、中央集権国家や奴隷制、家父長制の成立により、戦争は社会的につくられたものだということが考古学や人類学によって、あきらかになっている。すくなからず10万年ほど前まで、人類は大規模な暴力とは無縁であった。戦争システムが社会を左右するようになったのは、紀元前4000年ころからとされる。

市民による戦争廃絶ための最初の組織が1816年にでき、一連の画期的な活動がなされたように、われわれは、まったくゼロからはじめるのではない。20世紀は、歴史上、もっとも凄惨をきわめたとされるが、他方、非暴力によるピープルパワーを推進し、戦争への代替であるもうひとつの地球規模での安全保障システムとなる仕組みや価値、手立てが生みだされ、進歩した時期でもあったということは、驚くに値しない。戦争システムのみによって、何千年もの間、紛争への対処がなされてきたことからすると、きわめて画期的なことである。今日、戦争システムにたいする平和への代替システムの萌芽があり、成長がみられる。平和への転換はすでになされつつある。

19世紀中頃は、国際平和が希求され、めざましい進展がなされた。1899年には、はじめて地球規模での紛争に対処する機関である、国家間の紛争を裁定する国際裁判所（国際司法裁判所）ができた。国家間の紛争にたいして、世界議会となる国際連盟という組織を設置する試みもなされた。1945年に国際連合が設置され、1948年には世界人権宣言が採択された。1960年代になると、1963年に部分的核実験禁止条約が締結さ

れ、1968年に署名がはじめられ1970年に発効した核兵器の不拡散に関する条約の核兵器に関する条約が成立した。以降、1996年に包括的核実験禁止条約、1997年には対人地雷禁止条約、2014年には武器貿易条約が採択された。地雷禁止条約がNGOと政府の協議によって草案がつくられ、署名し、批准するようにはたらきかけることによってできたように、それまで以前にはみられなかった市民外交による成果であった。ノーベル委員会は、平和への実効のあるとりくみとしてICBL（地雷禁止国際キャンペーン）による活動を評価した。1998年に、国際刑事裁判所が設立され、2002年に発効した。子ども兵の徴募・利用に関する法整備も検討されている。

3.2 非暴力：平和への基盤

マハトマ・ガンジーやマルチン・ルーサー・キング Jr. らによって、暴力にどのように対処したらよいか、世界のいろいろな地域でさまざまな試みがなされた。そうした成果から平和的に変革をすすめる方法がきずかれてきた。これらの非暴力によるたたかいは、権力者と被抑圧者との力関係を変えることでもあった。

非暴力研究で知られるジーン・シャープによる権力に関する「同意理論」では、支配の権力は、統治される者の同意にかかっていて、いつでも同意はやめられるということが、あきらかにされている。そこに真の非暴力のちからがある。紛争での社会における人びとの心理を変えることにより、抑圧者が不当な扱いや搾取をつづける意志をそぐことができる。非暴力によって、政府の圧政を無力化し、人びとを統御できないようにするのである。近年、非暴力による成功事例は枚挙にいとまがない。4

ジーン・シャープは「支配にたいして、全能の神から授けられたとされる権力を退け、強大な支配者、外国からの侵略、独裁、抑圧的制度、強奪、経済的にちからを握るような者への同意を拒み、抵抗するといったさまざまな歴史がある。思いのほか、世界の多くのところで、抵抗や不服従、妨害行為といった、たたかいがなされてきた」とも述べている。

Erica Chenoweth と Maria Stephan5によって、1900年から2006年にかけてなされた非暴力抵抗運動によって、より安定した民主主義社会が実現され、武力闘争よりもより倍も成果をおさめた、と統計的に示された。戦争より、非暴力による手だての方がすぐれており、今や、非暴力による運動は、地球規模でのひろがりをみせるほどの勢いをもつようになった。また非暴力は伝染する6。非暴力は現実的な代替策である。わたくしたちの青写真でも、非暴力について学び、実践への道筋が示されている。非暴力抵抗運動とともに、平和への制度を強固にすることにより、今から6000年ほど前から、人びとがとらわれてしまっている戦争という鉄の檻から脱することができる。

4.0 もう１つの地球規模の安全保障

戦争をなくすのに、唯一のやり方があるわけではない。いくつもの重層的に織りなされたとりくみが、功を奏する。World BEYOND Warは、戦争システムを解体し、代替となるもう１つの地球規模の安全保障制度を創造することであり、そのための今ある萌芽をさらに進展させる。いずれにしろWorld BEYOND Warは世界政府を提唱するのではなく、自発的な参加による統治機構が網の目のようにつながっており、暴力と支配をしりぞけ、文化規範を転換させることをめざしているる。

4.1 システムとはどのようなものか

システムは、たがいに連関する網の目のようになっていて、それぞれがフィードバックによって相互作用する。A点はB点に作用するのみならず、B点からもA点にフィードバックがなされるように、網の目のすみずみにある点は、すべて相互に依存しあっている。戦争システムにおける教育がどのようなものか、考えてみる。高校に退役軍人を配備し予備的に訓練をするプログラム（Junior Reserve Officers' Training Corps : JROTC）は顕著なものだが、歴史の授業において、戦争は愛国心からなされ、戦争は不可避であったとか規範化されるのも戦争システムのあらわれであろう。

他では、教会で勝利のために祈り、政治では選挙での票を得るために、軍需によって景気がよくなり就業が増加した流布される。また軍産複合がすすみ、除隊後、退役士官が、軍需産業の執行部として再就職し便宜をはかる、メディアにおいて軍事専門家として迎えられるなど、国防省や軍関係からの仕事を請負うようになる。戦争システムは、信念や価値、技術なども組み合わさり、補強される。戦争システムは強固なものだが、十分な反動によって変化の局面をむかえ、変化は急速に進展する。

4.2 もう１つの地球規模の安全保障システム

現在の国家安全保障を代替する、もう１つの地球規模の安全保障システムは大きく、１）非武装による安全保障、２）非暴力による紛争解決、３）平和の文化の創造の３つからなる。

１）非武装による安全保障
もうひとつの地球規模の安全保障システムは、現在ある制度の代替として非武装化をすすめるものであり、そのための方法や計画ををすすめる。

２）非暴力による紛争への対処
今ある制度や方策をどのように改革できるかを探求する。現在の安全保障は役に立っておらず、不適当なものであり、改革のためにもうひとつの別の代替案を提案する。安全保障のために非暴力によるとりくみをすすめるための手立てや仕組みなどの用意はできている。

３）平和の文化の創造
より望ましい世界秩序への行動やビジョンのもと、平和への社会文化規範や価値、原理を理解し、平和の文化の創造にかかっている。これらの原理は、現在のまた代替する計画や方策について判断する際のリトマス試験紙のような役割を果たすものと思われる。

これらは、順番にまた別々になされる必要もなく、いずれのとりくみはかならず相互に影響するので、適切に運動にとりくむ必要がある。ただし、これらはかならずしもカテゴリーにわけられるものではなく、理論的かつ実践的な評価にもとづいて、むしろ複合的になされる。次にあらたな地球規模の安全保障システム概要[表]を示す。あたらしい代替安全保障の枠組みを構想し、あたらしい制度を形成する、これまでにない、思考をはたらかせるのである。

グローバルな安全保障システム概略

構成要素	非武装による安全保障	非暴力による紛争解決	平和の文化の創造
主な原理	1. 非武装による安全保障 2. あらたなシステム創造するために、これまでのものにとってかわる安全保障制度の確立と、思想をつくる	1. 国家間および自国における紛争に対処するための組織を創設する ● 予防的安全保障体制への移行 ● 国際組織および地域連携の改善・強化	1. 安全保障への代替への倫理的枠組や価値、原理を形成し、またその評価のあり方も確立する 2. 平和の文化のための実務的原理をつくる
実現のための手立て・行動	● 非暴力規範と軍事介入に変わる手立てへの理解と確立 - 非挑発的防衛体制への移行 - 在外軍事基地の解消 - 軍事同盟の解体 - 侵略と占領の終結 ● 軍縮 - 通常兵器の削減と撤廃 - 武器取引の非合法化 - ドローンの不使用 - 大量破壊兵器(核、化学、生物兵器)廃絶 - 宇宙における兵器使用の非合法化 ● 平和経済の創造 - 軍事費を再編し経済転換をはかる - 経済による戦争予防 - 安定的で、公正な、持続可能な地球規模の経済をつくる - 国際経済機関(通貨制度)の民主化s - 環境保全のための地球規模の開発支援基金の設置 ● テロリズム対応の再構築 ● 平和と安全保障における女性の役割の拡大	● 国連改革 - 国連憲章改訂 - 総会改革 - 安全保障理事会改革 - 財政の適正化 - 紛争予測と早期対応 - 予防的調停体制の確立 - 先住民運動との連帯 - PKO(平和維持活動)改革 ● 国際法 - ICJ国際司法裁判所の強化 - ICC国際刑事裁判所の強化 - 条約遵守の促進 - あらたな諸条約の整備 - 真実と和解委員会の創設 ● 非武装による介入の支援：市民による紛争維持部隊の活用 ● 市民による非暴力の防衛隊の創設 ● 人道的な地球規模の統治への代替原理の構築 - 人道的な地球規模の統治への代替原理の構築 - 地球連邦および地球憲法 - 世界緊急時会議 ● 地球規模の市民社会と国際NGOの役割の理解し拡大する	● 平和の文化の形成 - あたらしいもの語りを描く - 変化を確信する ● グローバルな自然に根ざすシチズンシップの醸成 ● 平和教育および平和研究への助成、普及 ● ピースジャーナリズムの発展 ● 平和を達成するために宗教が役割を果たす

5.0 安全保障の非軍事化

安全保障の非軍事化へは、軍事への依存を再考し、減らすことが求められる。軍事介入を安全保障のための手立てとしないようにするために、いくつか基本的なことがらを提唱する。非挑発的防衛体制への転換、在外軍事基地の廃止、軍事同盟の解体、侵略と占領の終結など、多くは移行的なものである。代替安全保障の根幹は軍縮であり、そのための根拠を示し、全面的完全軍縮（非武装化）をすすめるための手立てを支持する。通常兵器や化学、生物兵器、大量破壊兵器、宇宙兵器、ドローンなど、また武器貿易についても含まれる。現在のシステムは、強固な軍産学複合体からなっているので、平和経済への移行も考えなければならない。経済を転換するには、安定的な、公平で、環境維持可能な経済の創造、民主的な国際経済機関（通貨制度）を確立することも必要である。代替システムは、テロリズムにたいする非暴力で、非軍事的なより効果的な対処を採用することを支持する。さらに安全保障への決定において、また、平和維持活動への計画や展開において女性の役割を増大させることがきわめて重要だということは言うまでもない。

5.1 政策および行動への提言

移行期への提言
・すべての国が、すみやかに在外軍事基地をなくし、軍事同盟の解体およびあらゆる侵略と占領をおわらせ、非挑発的体制に移行する。
・現行の軍縮関連条約を、すべての国が完全に履行する。
・個人および団体、企業が投資を引きあげる（ダイベストメント）ようすすめること。

転換への提言
・あらゆる軍縮条約や協定を着実に実効することにより、全面的完全軍縮（非武装化）をすすめる。
・軍需経済から、平和と持続的な経済への転換させるための包括的な施策をつくる。
・安全保障のあらゆる決定において、生態系および環境安全保障への課題を、短期的・長期的環境アセスメントも併せて、十全に考慮すること。
・国際通貨制度の民主化。
・あらゆるテロリズムによる行為にたいする初動措置は、国際テロリズムを支持する国家によるものであっても法の支配による非暴力によるものでなされなければならない。
・平和と安全保障や平和構築への決定における女性の役割と参加を、国連安全保障理事会決議1325と1820を遵守し、より促進させる。

6.0 非暴力による紛争への対処

あらたな地球規模の安全保障システムは、紛争に非暴力で対処するための手立てや組織、制度を含むものとし現在の制度への改革と、あらたな制度とのかねあいをはかるものとする。現存する国連システムは、集団安全保障からなっている。集団安全保障においては国家利権の相克がさけられないという難点がある。さまざまな機能が有効にはたらいていないとしても、国連システムは、現時点では有力な国際的な統治機構である。他、国連には多くの機能があり、また第三者として安全保障を決定する機関としての可能性もあり、それゆえ、国連による安全保障機能を強化するための諸改革を慎重に検討する必要がある。国際法は、代替システムの重要な鍵となる機能となるものである。無政府主義にたいして、法の執行には限界はあるものの、非暴力で紛争や対立に対処するのに国際法が、必要不可欠なものとなる。国際法を強化するには、ICC（国際刑事裁判所）とICJ（国際司法裁判所）の働きを十全にするために、幾多の改革を提案する。他、今ある条約を完全履行をすすめるとともに、あらたな条約の制定へのとりくみ、また、現在のものの代替となる司法や平和構築への実現へのとりくみも提案する。国民国家からなるシステムは機能不全になっていて、わたくしたちの手によるそれにとってかわるもう一つの安全保障システムを機能させるために市民社会の参加をどのようにすすめるかを見出す必要がある。現在、さまざまな文民平和維持隊が、世界の紛争地域ですでに重要な任務についている。わたくしたちが、ジーン・シャープによる「文民によ

る平和隊」構想の可能性をよく吟味する必要がある。非暴力による「文民による平和隊」は、きわめて明快で、他国を侵略するということの魅力を失わせるものである。また、安全保障にたいする考え方、すなわち、平和の文化への転換にあたり、すべての市民が非暴力による抵抗運動すすめることのできるようになるための手立てを身につけることが求められる。グローバルガバナンスにおいても、将来の市民が平和な世界秩序を導くことができるための不可欠な原理とはたらきを検討し、既存のシステムへの代替を提案する。

6.1 政策と行動への提言

・集団安全保障から共通安全保障へのパラダイムシフトをはかるための国連改革へのさらなる研究を求める。
・国連安全保障理事会の構成と常任理事国拒否権への民主的な改革をすすめる。
・よりすぐれた紛争予測と紛争への対処法を開発する。
・平和維持と平和構築に即応するチームを組織できるようにする。
・国連予算を現在の軍事費に相応する額に引きあげる。
・国際法の法的強制力の強化と遵守を増大させる。
・平和および安全保障のために政策決定と行動へのグローバルな市民社会の役割を増やす。
・市民による防衛を、たくさんの人が学ぶための、モデルや制度、実施可能性を追究する
・人道的なグローバルガバナンスへのあらたな提言を探求し、提示する。

7.0 平和の文化の創造

平和の文化に関する宣言および行動計画の第２条には、「平和の文化の個人および集団、国家の平和につながるような価値や態度、立ち振る舞い、生き方を形成することで平和の文化が促進される」とされる。平和の文化で促進される個人および集団、国家の平和につながるような価値や態度、立ち振る舞い、生き方こそが、安全保障システムにも不可欠な構成要素となる。平和の文化は、わたくしたちが選びとり、切望する世界のビジョンおよび指針である。社会的に行動することにより、わたくしたちが直面する反対を、熟省し代替を構想することによって自身のエネルギーをむけることができる。前に述べたように共通安全保障には人間の安全保障および生態系の安全保障が含まれており、この冊子で提示されている代替原理や方法を見極めるための非暴力は倫理的また規範的な枠組となっている。ここでは、「あたらしいもの語り」への、すなわちすでに兆しのある平和への進化とはどのようなものか、理解をはかるものとする。平和への進化のあらわれの確固たる潮流は、平和への変化は可能だという希望となり、かならずしや成し遂げることができる、という信念をもたらす。地球大のシチズンシップを得るための教育的とりくみは、地球は皆に共有されていて、ありとあらゆるものがつながり、相互依存しあっているという基本理念を形づくる。フォーマルな学校教育およびノンフォーマルな組織化されていないさまざまな教育機会において、平和教育と平和研究がなされ、平和システムへの「ソフトウェア」を書くための重要な手段となる。さらに、平和システムのためには平和ジャーナリズムを育成することもきわめて重要となる。紛争の温床として何が問題となるか、相反する複雑な背景も示し、紛争予防のために、メディアには多大な責任があるものの平和への動きは主要な報道機関ではいつも無視され、とりあげられないので、平和ジャーナリズムの重要性を強調しておきたい。また、しばしば紛争の原因とされる宗教が果たす平和構築のための役割と可能性をも考察する。

7.1 政策と行動提言

・市町村や都道府県、国家において、国連平和の文化に関する宣言と行動計画にある諸原理を達成するための計画を立案するようにはたらきかける。
・地球大のシチズンシップへの理解をはかるためのカリキュラム開発を支援する。
・平和研究への助成を増額する。
・あらゆるフォーマル教育またノンフォーマル教

育の機会において、また教員養成研究機関において、平和教育を普遍化する。
・平和ジャーナリズムを推進する責任のあるメディア発信を支援する。
・あらたに生まれつつある「あたらしいもの語り」を公開する。
・宗教による平和維持・平和構築活動を促進する。

8.0 転換を加速する：WORLD BEYOND WAR運動を巻き起こすために

もう一つの地球規模の安全保障システムは、たんなる抽象的な概念ではない。戦争をなくすこと、また、公正で永続的な平和を求める世界中の団体および活動家やボランティアによる草の根のネットワークであるWorld BEYOND Warがめざすところである。
戦争に関する神話を解体し、戦争への代替を学び、構造的かつ文化的変革をすすめるために、平和教育と非暴力直接行動の両面でとりくみをすすめる。平和という、たった一つ、唯一の大義のために結集した世界中の人びとによる多様な活動が、この運動の強みとなっているといえる。
World BEYOND Warによる平和宣言（Declaration of Peace）には、170カ国から500をこえる団体と75000人もの個人が署名をし、非暴力でのとりくみを誓約した。
World BEYOND Warは、世界各地にある支部と連携団体からなり、中央主導ではなく自発的な、地球規模の協働とボトムアップによる意思決定によってすすめられる。World BEYOND Warによる平和宣言は次のとおりである。

World BEYOND Warによる平和宣言

www.worldbeyondwar.org/individual

戦争とミリタリズムは、わたしたちを守るどころか、安全を脅かすものであり、人びとを殺し、傷つけ、大人も子どもも乳幼児までもがこころを病み、自然環境をいちじるしく破壊し、市民権を侵害し、人びとの生活を支える経済を枯渇させ、資源を吸い上げるものであるとの理解のもと、あらゆる戦争および戦争への備えをなくし、永続的で公正にもとづく平和のための非暴力によるとりくみを支持することに賛同し、署名する。

戦争をなくすための運動をすすめるために、これまでのように特定の兵器や戦いが、悲惨であるとか、妥当かどうかという点で反対するのではなく、戦争そのものを問題にするのである。

8.1 連合の進展

運動を総合的にすすめるために、さまざまな多元的な連合である「融合組織」を形成するのを優先させる。社会的にも生態系へも軍産複合体の影響が拡大するなか、軍産複合体にたいして、環境保全のために活動する人びとや宗教（信仰にもとづく）団体および宗教者（信者、信徒、教徒）、倫理学や地域健康福祉、精神保健、経済学、歴史などの専門家、ジャーナリストや労働組合、市民自治、グッドガバナンスを求める活動家、国際協力や海外旅行者ほか、さまざまな団体や個人が反対している。このようなさまざまな部門を横断する連携をはかることが求められる。また、さまざまな部門との連携によって、軍事費を削って、教育や福祉、住宅、芸術、科学、再生可能エネルギー、道路・港湾・河川・鉄道・情報通信・下水道・学校・病院・公園・公営住宅などのインフラ整備などにまわすことの要求を実現させるのである。この広汎な連合によって、活動家が「1つのサイロ」というタコツボにおちいるのを避けることができる。AGSSは、さまざまな社会運動団体が、それぞれの団体や運動の独自性を失うことなく連帯できるよう、求心力のある言葉を提供する。

8.2 平和教育プログラム

平和教育は、地球規模の安全保障システムを実現させるためにきわめて重要な要素であり不可欠である。平和教育は、戦争をなくすための知識と、戦争をなくすために何をなすかからなり、World BEYOND Warによって、たくさんのツールとリソースを提供される。戦争をなくすこ

とについての理解を深め、戦争をなくすことへの支持を拡大すすめることができるように教材がつくられ、ボランティアによるWorld BEYOND War ブッククラブやディスカッショングループが世界中にでき、映画上映会や講演会などが展開されるようになるであろう。また、World BEYOND War のウエッブサイト（https://world-beyondwar.org/ja/ ）は情報を無料で提供するハブの役目を果たすであろう。ウエッブサイトには軍事に関する地図や図、画像、論議となる話し合いのテーマ、文章、ビデオなどがあり、戦争はなくすべきであり、なくさなければならず、なくすことができる、ということを学ぶことができる。オンラインコースやウェビナー（Webinar）、スピーカーズビューロー（当事者の体験談を通じ、正しい知識や態度を地域社会に伝えていく活動）、帰還兵によるStudy War No More AGSSによるスタディ・ディスカッションガイドも用意される。少額寄付によるグローバルビルボードプロジェクトでは、看板やバス停、地下鉄広告によって、戦争をなくすためのメッセージを掲示し、人びとの目にふれるようにするような工夫に満ちたとりくみもすすめる。

8.3 非暴力直接行動キャンペーン

戦争をなくすためのキャンペーンには、短期な、また中期的な目標が設定されており、戦争システムを転換するためのこまかなステップが示されている。武器製造からのダイベストメント（資本の引きあげ）、カウンター・リクルートメント（反徴兵活動）、基地封鎖、グローバル・ジャスティスなどの非暴力直接行動によるキャンペーンを組織し、とりくみがなされる。こうしたキャンペーンは、平和教育のプログラムと並行してなされる。いづれも政策を変えるようはたらきかけるとともに、学習を継続させ、意識を高める。キャンペーンのための教材が提供され、学習会を組織し、宣伝するとともに、World BEYOND Warにとりくむ活動家やボランティアなどとの仲間づくり、他の団体とも連携し、平和のための世界的なキャンペーンを計画し、すすめ、前進させるのである。

9.0 結語

戦争は選択肢の１つでしかない。しかも良くない選択であり、この選択はやがて、かならずしや戦争を引きおこすものとなる。戦争は、人間に遺伝子として、あるいは人間性として付与されているものではなく、紛争への唯一の対処法ではない。非暴力行動こそが、より有効な選択であり、紛争を鎮静化させ、非暴力行動によって紛争を解決させることができるのである。紛争が起こってから非暴力行動にとりくむというのでは遅い。非暴力行動は、紛争を予測し、調停や裁判所による裁定、平和維持活動として社会制度に組み込まれなければならない。非暴力は、平和の文化からなり、教育によって知識やものの見方を学び、信念や価値が醸成される。しかし、意図的に前もって戦争への対処を準備するような社会では、安全でない状態が恒久化するのである。人類はなぜこのような閉塞状況におちいったのだろうか。戦争による被害を修復するより、戦争を防ぐ方があきらかに経済的である。戦争は人びとに苦難をもたらし、後々までトラウマが継続される。紛争後まで暴力は蔓延し、対処しなければならず、紛争を未然に防ぐ方がはるかに負担がすくない。戦争によって利益を得る権力者はわずかにいるかもしれないが、戦争のない社会ではより多くの人が、利を得ることになる。平和を実現するには、平等で、より良い選択を事前にしなければならない。平和が欲しいなら、平和を備えなければならないのである。

注

1)「暴力に関するセビリア声明」
Read the Seville Statement on Violence here:
http://www.culture-of-peace.info/vita/2011/seville2011.pdf
2) 戦争抵抗者連盟（War Resisters League）
http://www.warresisters.org/pages/piechart.htm
3）戦争神話を脱するための議論
https://worldbeyondwar.org/inevitable/
4) Sharp, G. (1980) による「戦争をなくすためにな すべきこと」アルバート・アインシュタイン研究所（Albert Einstein Institution）
https://www.aeinstein.org/wp-content/uploads/2013/09/MakingtheAbolitionofWaraRealisticGoal-English.pdf

5) Chenoweth, E, & Stephan, M. (2011). Why civil resistance works: The strategic logic of nonviolent conflict. New York, NY: Columbia University Press
6) “Contagious Nonviolence” （伝染的非暴力）
http://communication.warpreventioninitiative.org/contagious-nonviolence/

WORLDBEYONDWAR.org

a global movement to end all wars

地球（グローバル）安全保障制度：戦争への代替案

平和の文化を創造する

- 宗教による平和創造(宗教的和平・仲介)
- 平和の文化の確立
  - あたらしい物語の普及
  - 変化を認識・承認する
  - 惑星的 / 地球市民性（グローバル・シチズンシップ）
- 平和研究
- 平和教育
- 平和ジャーナリズム

非武装(非軍事による)安全保障

- 非暴力による規範
  軍事介入に代わるもの
  - 非挑発的防衛姿勢への変更
  - 外国軍基地撤廃
  - 軍事同盟解体
  - 侵略および占領終結
- テロリズムへの対応を再設定する
- 平和経済(ピース・エコノミー)の創造
  - 軍事支出の見直し
  - 戦争予防のための経済を確立する
  - 持続可能で公平、公正な地球規模経済の実現
  - 国際経済機関の民主化
  - 環境に配慮した持続可能な地球規模の復興計画の創設
- 女性の役割の強化
- 軍縮/非武装化
  - 通常兵器の削減 / 廃絶
  - 武器取引の非合法化
  - ドローン使用の廃止
  - 大量破壊兵器削減 / 廃絶
  - 宇宙への兵器配備の非合法化

暴力によらない戦争への対処(マネジメント)

- 国連改革
  - 国連憲章改革
  - 総会改革
  - 安全保障理事会改革
  - 財政基盤適正化
  - 紛争予測 / 早期紛争マネジメント
  - プロアクティブ（積極的な）調停チーム
  - 先住民運動との連携
  - 平和維持活動改革
- 地球市民社会およびNGO
  - 市民(民間人)による平和維持部
  - 市民力による防衛
- プロアクティブ（積極的な）安全保障政策への転換
- 国際法
  - 国際司法裁判所の働きをつよめる
  - 国際刑事裁判所の働きをつよめる
  - 条約遵守を奨励する
  - あらたな諸条約の作成
  - 真実和解委員会の設置
- 国際機関および国家間連携強化
  - 地球規模統治(グローバル・ガバナンスの基本原則を確立する
  - 地球連邦 / 地球憲法
  - 地球機構(グローバル)の緊急会議